

編集後記

社研年報は本号で三〇号となりました。編集後記を書くにあたって、これまでの後記を通読してみました。とりわけ初期の号では、編集委員の年報刊行への並々ならぬ情熱がうかがえました。また多くの号において、執筆者の原稿遅れと年度内刊行というタイムリミットとに挟撃された苦勞が吐露されています。

本号は、春の総会の段階では、若干多めの分量となるはずでしたが、執筆辞退者が相次いだために例年に比べるといささか見劣りする厚さとなってしまいました。第一四号の編集後記では、「原稿しめ切り寸前になって……、おりられた」所員がいたと実名を挙げて書かれています。その号の編集担当者の気持ちは理解できますが、締め切り直前の辞退はやむを得ないと思います。しかし、締め切り後の辞退については、いささか慌ててしまいました。当研究所の年報の編集は編集者と執筆者との信頼関係を前提に成り立っている仕事ですから、締め切り直前に催促するのは礼を失する行為と考えてきました。事前通告なしに執筆を降りるということが常態となるようであれば途中で進捗状況を伺い、場合によっては督促するという必要になるのかもしれない。所員諸氏

のモラルに委ねざるをえない事情をご賢察ください。

書評については、外部の研究者三名に執筆をお願いしていましたが、二名のかたはそれぞれの事情で期限内に書いていただくことができなくなってしまったのは残念です。限られた期間内に原稿をお寄せいただいた藤井健氏には御礼申し上げます。

本号では、グループ研究からの申し出もなかったため特集を組むことをしませんでした。社研の活動そのものは本年度も活発におこなわれたと思いますが、その成果は主として月報誌上でみることが出来ます。月報原稿が豊富であった分、年報への貢献が減ったのかもしれない。

年報の発行は第二号（一九六七年）から第九号（一九七五年）までの八年間は未来社、第一〇号（一九七六年）から第一九号（一九八五年）までの一〇年間は時潮社、そして第二〇号（一九八六年）からはすでに一年間の長きに亘って公人社にお願いしています。怠惰な編集子に代わって実質的な作業を引き受けていただいた公人社の大出明知氏に心より御礼申し上げます。そして毎年のことではありますが我儘な執筆者との応対に愉快ではない思いをされたこともあったかもしれない当研究所の職員・竹内佐和子さんに感謝いたします。

（一九九六年一月二九日 編集委員会・石塚良次）